

Relief

[リリーフ]

2019
APRIL
Vo1. 35

CONTENTS

- 財団設立10年を迎えて
- 2019年度公募助成贈呈式及び助成先一覧
- 2018年度公募助成活動紹介
- 2019年度AED訓練器等助成先決定
- AED訓練器等助成活動紹介
- 2018年度第8回いのちのセミナー
- 2018年度安全セミナー
- 今後の催し等のお知らせ



JR西日本あんしん社会財団は設立10年を迎えました



公益財団法人 JR-West Relief Foundation
JR西日本あんしん社会財団

JR西日本あんしん社会財団は 設立10年を迎えました

公益財団法人JR西日本あんしん社会財団は、2009年4月1日に設立され
2019年4月1日に設立10年を迎えました。財団の10年のあゆみを振り返ります。



理事長
佐々木 隆之

西日本旅客鉄道株式会社
相談役

2019年4月1日、当財団が発足して10年を迎えることができました。これまでの皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。

当財団は、2005年にJR西日本が福知山線で重大な事故を発生させたことへの深い反省の上に立ち、将来にわたり「安全で安心できる社会づくり」に少しでもお役に立てるようにと、2009年4月1日に設立されました。

これまで、受講者の皆さまに多様な観点から「いのち」や「こころ」について考えていただくセミナーを開催するとともに、事故や災害への備え、そして被害に遭われた方々への心身のケアなど、「いのち」を支える身近な活動や研究を広く募集し助成を行う「公募助成」などの事業に取り組んでまいりました。

熱心にセミナーに参加されている皆さまや、真摯に活動や研究に取り組んでおられる助成先の団体・研究者の皆さまの姿に感銘を受けるとともに、多くのお支えをいただいたことに改めて深く御礼申し上げます。

大切な人を亡くされた方々の深い悲しみは時間が経過してもなくなるものではなく、グリーンケアなど「こころ」のケアに関わる取り組みは今後も大変重要であると考えています。一方で、昨今の状況を見ると、各地で地震や台風、豪雨など大規模な災害が頻発、激甚化しており、それらへの対応も必要になっています。

今後とも、当財団の設立趣旨を踏まえ、「安全で安心できる社会づくり」の一助となる取り組みを行っていただけるよう、努力を重ねてまいります。引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

財団のあゆみ

JR西日本の全額寄付拠出により設立されました。	2009年度	2009年4月1日	一般財団法人 JR西日本あんしん社会財団設立
JR西日本が行っていた、公開講座に対する寄付助成を当財団が継承しました。		2009年4月3日	助成事業として聖トマス大学「日本グリーンケア研究所」公開講座実施(2010年度から上智大学に移管)
「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」第4条に基づき公益認定されました。		2009年7月1日	財団ホームページ開設
地域社会の安全について考えていただく「安全セミナー」を、初めて開催しました。		2009年11月9日	公募助成事業募集開始
助成対象団体および研究者が集まっていたり、贈呈書の授与を行いました。		2010年1月6日	内閣総理大臣より公益認定、公益財団法人となる
初期救護の重要性を啓発するため、尼崎市消防局の協力のもと、JR西日本と共催で「救急フェア」を初めて開催しました。		2010年1月20日	尼崎市防火協会主催「災害対策・救急セミナー」への寄付協力
		2010年2月25日	公募助成助成先決定
		2010年3月5日	財団初の主催セミナー「安全セミナー」開催
		2010年3月29日	公募助成贈呈式開催
		2010年3月	広報誌「JR西日本財団ニュース」発行
	2010年度	2010年4月	京都大学「社会基盤安全工学講座」へ寄付助成(～2012年度)
		2010年10月30日	「救急フェア」開催(JR尼崎駅前)



講演風景



贈呈式風景



救命処置体験

2010年度	2011年1月23日	「こころのセミナー」開催(2012年度より「いのちのセミナー」に名称変更)
2011年度	2011年4月18日	東日本大震災被災地に関する活動助成緊急募集開始
2012年度	2012年4月	「救急フェア」京阪神7駅で開催(2012年度は、近畿2府4県12駅、新幹線3駅に拡大)
	2012年5月9日	連続講座「『いのち』を考える」開講(10週連続のセミナーを年2回実施)
	2012年5月29日	財団シンボルマーク、英語名「JR-West Relief Foundation」決定
2013年度	2014年1月19日	救急フェスタ in 京都「いのちのリレー大会」開催
2014年度	2014年8月1日	AED訓練器等助成事業の募集開始
2015年度	2015年4月1日	ホームページデザイン変更、スマートフォン対応化
2016年度	2016年6月29日	Facebook開設
	2016年10月1日	「平成26年広島市土砂災害」を対象とした活動助成(特別枠)募集開始
2017年度	2017年4月	「救急フェア」をJR西日本に移管
	2017年5月28日	「いのちのセミナー」と「連続講座」を統合し、「いのちのセミナー」を開催
2018年度	2018年10月1日	「平成30年7月豪雨(西日本豪雨)」を対象とした活動助成(特別枠)募集開始

東日本大震災の被災地の方々の支援・救援活動や心のケアなどの活動を対象とした緊急助成について、募集を開始しました。

活動助成報告会(2012.9.1)

シンボルマークは、「安全で安心できる社会」の実現において最も大切である「いのち」を支える「心」という文字をモチーフにしました。

シンボルマーク

救命処置の普及啓発を目的に「救急フェスタ」を開催し、その中の主なイベントとして、一次救命処置を競技形式で実施する「第1回いのちのリレー大会」を実施しました。

「いのちのリレー」大会
競技風景

救命処置の普及啓発を図るため、公募によりAED訓練器や訓練人形を提供する助成事業を開始しました。

助成先活動風景

2014年に発生した「平成26年広島市土砂災害」に関わる活動について、近畿2府4県以外に広島県の団体も対象としました。

助成先活動風景

悲嘆やグリーンケアといったテーマはもとより、多様な観点から「いのち」をとりあげる「いのちのセミナー」を開催しました。以降年8回開催しています。

講演風景

主な事業実績(10年間累計)

取り組み	内容	実績
「いのち」や「こころ」をテーマにしたセミナー	多様な講師を招いて、「いのち」や「こころ」について考えていただくセミナーを開催	開催回数 117回 受講者数 4万9千人
安全セミナー	「防災」をはじめ幅広い視点から、地域の安全について考えていただくセミナーを開催	開催回数 11回 受講者数 6千人
救命処置の普及啓発活動	駅などにおいて、AEDや心肺蘇生法等の救命処置の体験をしていただくイベントを開催	開催回数 144回 AED体験者数 1万人
AED訓練器等助成	一人でも多くの「助かる命」を救う救命措置の普及啓発に取り組む団体に、AED訓練器および訓練人形を助成	講習参加者数 3万人 訓練器助成数 86セット
公募助成	事故、災害や不測の事態に対する備えやその後のケアなど、「いのち」を支える身近な活動や研究を広く募集し助成	助成件数 446件 助成金額 4億円

当財団の活動などにつきましては
ホームページやFacebookを
ご覧ください。

JR西日本財団

ホームページ

Facebook





2019年度公募助成贈呈式を開催しました

JR西日本あんしん社会財団では、「いのち」に向き合い「安全で安心できる社会づくり」の一端を担いたいとの思いから、事故、災害や不測の事態に対する備えやその後のケア等、「いのち」を支える身近な活動や研究を広く募集し、助成を行っています。2019年3月25日（月）、2019年度公募助成の助成先に決定した団体や研究者の皆さまにお集まりいただき、贈呈式を開催しました。



当財団の理事長から、各団体と研究者の一人ひとりに思いを込めて贈呈書をお渡しいたしました。

受け取られる際の皆さまの表情からは、今後の活動、研究を成し遂げようとする固い意志が感じられました。



贈呈書授与後、各代表の方に今後の決意や抱負をスピーチしていただきました。身振り手振りを交えて語られる方もおられ、皆さまの今後の活動や研究に対する熱意が強く伝わってきました。

贈呈式後の交流会で、これからの決意や抱負をあらためてお聞きしました。

大阪府大規模災害リハビリテーション支援研究会



災害時に被災地で円滑なりハビリテーション支援活動を行い、震災関連死や生活不活発病を予防することを目的に、研修会、大規模災害を想定した実動訓練による人材育成を行い、シンポジウム、学会発表を行う団体

「災害時、現地の状況は被災地ごとに異なります。支援体制をいち早く作り上げる上において、本部や現地の活動団体などが情報共有し、的確な対応をとれるよう更なる体制作りが求められています。今後も引き続き、当団体の活動を通じてそのあり方を提案していきます。」(松岡 雅一さん〔左〕/副会長 中野 皓介さん〔右〕)

三原vivaプロジェクト実行委員会



西日本豪雨の被災地域において、遊びを通じた子どもの健全育成をすすめるとともに、地域福祉の推進、災害に強い地域作りを担う人材育成を行う団体

「被災地の子どもたちに安全で安心な遊び場を提供し、遊びを通じた子どもの健全育成を行います。この経験を通じて、子どもたちが地域を支える人材となることを願っています。」(副代表 柳原 綾さん)

大阪市立大学 生活科学部 特別研究員 志垣 智子



大阪北部地震後の賃貸住宅入居高齢者の生活の質の劣化状況と緊急時の救急カプセルの効用を検証し、地域包括ケアシステムの共助のあり方を研究する研究者

「大地震発生後、自宅に住めなくなり賃貸住宅に入居する高齢の災害弱者の方がおられます。災害による生活の質の低下状況を検証するとともに、関係市町村の社会福祉協議会と緊急情報共有活動プランを共有して、地域の共助のあり方を研究します。」(軸丸 政代さん〔左〕/志垣 智子さん〔右〕)

大阪大学災害ボランティアサークルすずらん



東日本大震災の被災地である岩手県のコミュニティ形成支援と、物販会や民泊体験を通じた復興支援を行うとともに、関西での東日本大震災の風化防止を図る活動を行う団体

「若さ、元気の良さ、明るさ等の自分たちの特徴を生かし、岩手県のNPO団体と一緒に復興支援や被災地での地域交流を通じて、被災者の皆さまが前を向けるよう支援を行っていきます。」(代表 川合 実美さん〔左〕/副代表 北野 翔大さん〔右〕)

近畿大学 准教授 石渡 俊二



災害時に被災地内の医薬品の使用状況を把握するシステムを開発するとともに、災害支援隊、行政・医療機関職員等への研修用教材を作成する研究者

「災害時、病院では医薬品が不足します。日本赤十字社や行政の防災訓練では試用され、大阪北部地震でも府からの要望があった被災地で医薬品を管理するシステムや体制作りは急務な課題です。更なるシステム開発・実験を行ってまいります。」(石渡 俊二さん)

兵庫教育大学 准教授 當山 清実



気象災害時における生徒等の通学の安全を確保するため、各学校の臨時休業の調査・研究等を通じ、学校の臨時休業基準のあり方を提案する研究者

「気象条件による登校、下校時に関する学校の臨時休業の基準は、曖昧なものがあります。これらの基準の運用実態を把握、見直しを検討し、今後、教育委員会などに提示できたらと考えています。」(當山 清実さん)

交流会の様子



交流会では、新しい出会いはもちろんのこと、久しぶりに顔をあわせる方々もいらっしゃったようです。それぞれの活動や研究の内容、近況についての情報交換、今後の活動での協力に向けて具体的な打合せを行う姿もみられ、熱気あふれる有意義な会となりました。

2019年度へ向けて～より一層安全で安心できる社会へ～

2019年度公募助成は58件の団体や研究者の方に助成させていただくことになりました。次ページでは、活動や研究を一覧で紹介しています。平成30年7月豪雨の特別枠追加に伴い、新たなエリアで活動される団体が増えました。

4月から1年間、活動や研究が始まります。当財団も団体や研究者の方々と協力しながら、より一層、安全で安心できる社会の実現に向けて少しでも貢献していきたいと考えています。これからの活動状況については適宜取材を行ってこの広報誌でご報告いたします。

2019年度の公募助成先58件が決定しました



【活動助成】事故、災害や不測の事態に対する備えに関する活動、発生後の心身のケアに関する活動

テーマ	団体名（50音順）
コミュニティ生成型防災事業 LODE(ロード)をより発展させた『障がい者を理解するためのチャート図』の普及活動	生きる力を育む研究会
地域全体で取り組む防災活動（被災地での勉強会から講演イベント、防災ウォークまで）	揖西北まちづくり協議会
国籍や年齢を問わずに非常時における自助・共助できる力の養成と実践をめざすワークショップ	特定非営利活動法人 インターナショナル
防災フォーラム in 大津「活断層地震 ラジオはあなたの命を守る」	特定非営利活動法人 HCC グループ
教職員や地域住民の救急医療・防災力向上を目的とするいのちのラリー と学びブース	大阪IJ いのちの授業
被災地でリハビリテーション支援活動を行うための人材育成と組織作り	大阪府大規模災害リハビリテーション支援研究会
障がい者が行う心肺蘇生と応急手当の普及	特定非営利活動法人 大阪ライフサポート協会
不登校の子ども等支援を要する子どもを対象とした地域防災ネットワーク 支援活動	関西福祉大学市橋研究室ボランティア学習グループ
大規模災害等に対する支援活動講習	特定非営利活動法人 きぼうの会
グリーンサポートによる地域コミュニティの活性化支援活動	グリーンサポート ラル大津
水害多発地域における子育て層による自律的な防災活動	公益財団法人 公害地域再生センター
かんまきサバイバルラボ	子どもサバイバルキャンプ実行委員会
災害救援 レスキューアシスト	災害時要配慮者救援 NPO レスキューアシスト
地域防災ネットワーク活動	さかい聴覚障害者防災ネットワーク
くらしと災害フォーラム 2019	特定非営利活動法人 Salut
ドローンを用いた地域防災訓練の検証	次世代エネルギー研究所
災害時における鍼灸・マッサージ活動のための支援情報共有ツールの作製	特定非営利活動法人 鍼灸地域支援ネット
「命を守る読み聞かせ」授業	特定非営利活動法人 震災から命を守る会
防災教育サロン	NPO 法人 日本教育再興連盟
市民災害支援隊スキルアップ事業	のまはら
Huuug なりきりステージ3 匹のこぶた～防災教育～	一般社団法人 ハーグ
家族や愛する人を失った方々を支える。グリーンケア提供者を養成する。	はずの会
一次救命処置たし算プロジェクト	B-NET@SAIDAIJI
ビリーブメントケアチーム「ビリーブ」	ビリーブメントケアチーム「ビリーブ」
JR 福知山線列車事故 被災者支援募金イベント フレンズかわにし 2019	フレンズかわにし実行委員会
流産・死産経験者で作るポコズママの会	ポコズママの会 関西
ほくせつ親子防災部	特定非営利活動法人 ママふぁん関西
臨時災害放送局開設訓練を通じた災害時の地域情報共有基盤の形成	和歌山県情報化推進協議会

[28件]

【活動助成（特別枠）】東日本大震災、平成26年広島市土砂災害、平成30年7月豪雨（西日本豪雨）に関する被災地・被災者支援活動

テーマ	団体名（50音順）
笑顔つながるささやまステイ	笑顔つながるささやまステイ実行委員会
プロボノを活用した被災地の生活再建支援の実践とこれからの災害に備えた活動の仕組みを構築する活動	特定非営利活動法人 エンディングノート普及協会 ※

[16件]

被災地での地域活性化ツアーおよび民泊の実施	大阪大学災害ボランティアサークルすずらん
東北被災地及び西日本豪雨被災地ふれあい語り部コンサート	NPO 法人 語り部おもちゃ箱音楽隊
東日本大震災復興支援こども理科実験教室 2019	京都技術士会理科支援チーム
子どもたち集まれ！！豪雨に負けない心を育てる！	災害で生活が変わった子供を支援する会 ※
医療系学生による福島県内での学生災害ボランティア復興支援活動	NARA Will 奈良県立医科大学 学生災害ボランティアグループ
いのちの大切さ	虹色の音
倉敷市真備町の緊急救援活動及び、避難所・仮設への慰問ボランティアツアー	被災支援ボランティア団体「おたがいさまプロジェクト」
西日本豪雨災害応援プロジェクト	ひだまり応援団 ※
びわこ☆1・2・3 キャンプ in 2019 夏	びわこ☆1・2・3 キャンプ実行委員会
大規模災害に備えアレルギー患者の共助の仕組みをつくる活動	三原アレルギーの会ひだまり ※
遊 viva 事業	三原 viva プロジェクト実行委員会 ※
支えあい助けあう心を紡ぐ場づくり活動	若者活動サポートセンターあおぞら ※
	※印は近畿2府4県以外に拠点がある団体 [14件]

【研究助成】事故、災害や不測の事態に対する備えや防止に関する研究、発生後の心身のケアに関する研究

テーマ	研究者名（50音順・敬称略）
歴史災害を題材とした逆ベクトル型防災教育プログラムの開発と多面的効果の検証	龍谷大学 政策学部 講師 石原凌河
災害時に医薬品を有効活用するための「医薬品保有情報共有システム」に対して「指揮担当者モード」および「教育研修用教材」を開発する研究	近畿大学 准教授 石渡俊二
外傷後成長の2つの側面に着眼した新たな被災心理支援プログラムの開発ーポジティブ心理学的アプローチは被災者支援に有用か？ー	兵庫教育大学 准教授 伊藤大輔
大都市圏における訪日外国人の災害時ヘルス関連ニーズ：インクルーシブな保健医療の実現に向けた看護ケアの検討	兵庫県立大学 地域ケア開発研究所 教授 梅田麻希
外国人をめぐるリスクとセーフティネット構築に関する学際的研究ー防災学と地域研究を繋ぐ	同志社大学 グローバル地域文化学部 准教授 王柳蘭
歩行者アクティビティへの分析に基づく災害弱者の避難に寄与する歩きやすい市街地整備手法に関する研究	大阪市立大学大学院 工学研究科都市系専攻 教授 嘉名光市
災害時における福祉施設・事業者等のBCP・DCP策定に関する研究事業	佛教大学 福祉教育開発センター 専任講師 後藤至功
多職種連携を重視した網羅的災害訓練プログラムの開発	大阪医科大学附属病院 医療技能シミュレーション室 副室長 駒澤伸泰
死別の悲しみとともにより良く生きるための知恵ーパターン・ランゲージの手法による体系的記述ー	関西学院大学 教授 坂口幸弘
高齢者賃貸住宅における地震災害後の高齢者QOL劣化状況把握と低減に資する救急情報共有活動プラン策定への研究	大阪市立大学 生活科学部 特別研究員 志垣智子
熊本地震から展望する幼児期における地震防災教育	和歌山大学 教育学部 准教授 高橋多美子
列車を情報発信拠点とする鉄道津波避難支援システムの検討	和歌山大学 システム工学部 准教授 塚田晃司
小中学校の通学路における学校安全に関する考察ー気象災害を対象としてー	兵庫教育大学 准教授 富山清美
視覚障がい者の転落事故低減を目的とした電子式歩行補助具の空間認識技術の研究開発	公益社団法人 NEXT VISION 常務理事 仲泊聡
被災地支援としての動物介在療法とロボットセラピーにおける被災者の心ケアの可能性についてー継続的な支援の効果ー	四條畷学園大学 リハビリテーション学部 作業療法学専攻 教授 野口裕美
外因死者遺族への精神的健康増進に向けた効果的対応法の確立	滋賀医科大学 社会医学講座 法医学部門 教授 一杉正仁

2018年度公募助成活動紹介

2018年度公募助成団体の11月～3月までの間の活動内容をご紹介します。
皆さま大変熱心に活動されています。

かなしみぼすと 11月6日(火) 公開講座「かなしみとともに生きる社会へ」



5周年事業の一環として、「災害現場における傾聴」と題した公開講演が行われました。グリーンケアについて考えるきっかけにしたいと、阪神淡路大震災のときの振り返りや東日本大震災の被災者に対し現在も行っている傾聴活動の紹介と、傾聴に必要な注意点について説明があり、対応を誤れば非常に残念な結果になってしまうと、傾聴する際の研修や訓練の必要性に言及がありました。昨今の自然災害を受け、人々の悲しみを受け止めることのできる社会がより一層求められていることや、グリーンケアについて多くの方が関心を寄せていることを改めて認識しました。

特定非営利活動法人 salut 11月24日(土)



くらしと災害フォーラム2018 女性の直感とまなざし

精神障害者や女性の生きづらさをテーマに、前千葉県知事の堂本暁子氏、鈴木大拙館名誉館長の岡村美穂子氏、詩人の上田假奈代氏の3名の講師を招き講演会と座談会が実施されました。普段意識されづらいジェンダーとしての女性の問題の理解や、生きづらい現代を自分らしく生きていくための気づきを得ることをねらいとした内容で、100名程の参加がありました。講師の語りは参加者にとって、「本来の自分」や「なりたい姿」を描けるきっかけになり、社会におけるジェンダー問題への理解につながるように感じました。

LFA食物アレルギーと共に生きる会 11月25日(日) 地域で考える防災「大阪編」～食物アレルギーを知る～



食物アレルギーのある方やその保護者等を対象に、食物アレルギーの情報提供や一般の方への啓発活動を目的とした地域防災イベントが開催されました。エビペン(アドレナリン注射)講習会や試食会などが行われ、280名の参加があるなど関心の高さがうかがえました。最新の食物アレルギーに関する情報発信、日常、災害時における備えに対する意識向上を目的としたイベントであり、災害があった時、配布される食べ物に対し強い恐怖を感じている食物アレルギーの人々が非常に多いことに気付かされました。

和歌山県情報化推進協議会 12月9日(日)



紀の川市総合防災訓練における「臨時放送局開設と地域災害情報共有の訓練」

紀の川市総合防災訓練の取り組みの一つとして実施されたもので、常設のFM放送局がないエリアに災害時の情報を迅速かつ適切に伝えるため、臨時のラジオ放送局を設置・運用する訓練が行われました。有事の際には地元高校生に活躍して欲しいという期待が大きく、参加した粉河高校の生徒の皆さんもその期待を理解し、情報の収集に真剣に取り組んでいる姿が印象的でした。災害時に、地域単位で情報の発信・共有を目指す取り組みは大変有意義なものだと感じました。

大阪府大規模災害リハビリテーション支援研究会 12月16日(日) 大阪JRAT活動報告、危機管理とBCPの講演会



2018年度大阪JRAT (Japan Rehabilitation Assistance Team) 活動報告会と、危機管理ジャーナリストの中澤幸介氏を講師に迎え「危機管理とBCP」と題した講演が行われました。被災地へ対応した医療関係者による避難所の現状等の発表の中で、地域によって支援対応が異なり、それぞれに合わせた環境整備やリハビリテーション支援が求められるため、対応が非常に難しいことなどの話がありました。講演では今後予想される南海トラフ地震に対するBCPをめぐる企業動向の話も行われ、日頃の備えにより、技術を高め、いかに迅速に対応できるかが大事であると強く感じました。

関西福祉大学 市橋研究室ボランティア学習グループ 12月17日(月) ハーモニー一む



不登校児童生徒を対象に、居場所づくりの活動を行いつつ、地域コミュニティづくりを通じ防災力を高める活動をしている団体です。今回は「一般社団法人おいしい防災塾」代表の西谷真弓氏を講師に迎え、前半は「防災意識の大切さ」と「子供の笑顔を絶やしてはいけないという意識を持つこと」についての講話、後半は「子供が喜ぶ防災お菓子ポシェット」を実際に作成しながら、子供への作成方法の伝え方指導がありました。ボランティアスタッフとの関わりを通して安心できるコミュニケーションを体験し、また人に教えることで自らに対する自信を持つことを通じ、一人でも多くの人の居場所を作りたいと語っていた代表の言葉が印象的でした。

虹色の音 12月26日(水) 虹色の音コンサート



本コンサートは平成26年広島市土砂災害の支援活動として例年夏に実施されていましたが、今年度は平成30年7月豪雨災害の影響で延期となり、改めてこの日実施されることになりました。ピアノ、エレクトーンの伴奏により子供向けの歌、愛唱歌、想い入れのある歌など13曲が披露され、また、曲間には災害からの年月を踏まえた語りが行われ、それにより個々の曲の魅力が一層引き出されていたようでした。参加者の一人から「いい歌を聞かせてもらった、これからも頑張ってください」と逆にエールを送られていたのが印象的でした。

特定非営利活動法人 震災から命を守る会 1月17日(木) 1.17 阪神淡路大震災からの教訓



南海トラフ地震に備え、和歌山市内の保育園、幼稚園等の園児約210人を対象に、分かりやすく防災に触れる防災教育が行われました。卵の殻をシートに敷き、その上を歩いてみることによる、ガラスの破片が飛散した状態の疑似体験、就寝中からの避難体験など、子どもにとって自分で出来る「命を守る」取り組みを体験できるプログラムで構成されており、クイズ形式で分かりやすく工夫された、自分を守るための授業も行われました。マスコミ各社の取材もあり、情報発信力のある盛況なイベントでした。子どもの頃から意識を高める防災教育は非常に大切な取り組みであると感じました。

特定非営利活動法人 フリンジシアタープロジェクト 2月16日(土) 防災演劇発表会ならびに防災イベント



防災をテーマにした演劇の発表会ならびに防災イベントが開催され、京都市岩倉明徳地区内の住民100名の参加がありました。防災演劇に参加した地域の小学4年生～6年生の16名は、台本作りから芝居の発表に至るまで、プロの劇団員の指導のもと、発声練習やウォームアップ方法などについて合宿を含めた練習を重ねたそうです。約45分間の芝居の中で、緊急速報メールを受信した場合の対処法や災害用伝言ダイヤル(171)の使用方法等の紹介が行われました。併せて、非常食の試食会や防災クイズ大会が行われ、防災意識の向上に寄与する大変有意義なイベントでした。

認定特定非営利活動法人 障害者放送通信機構 3月22日(金) 緊急災害時における聴覚障害者の情報保障活動イベントin和歌山



和歌山県の老人福祉施設で聴覚障がい者を対象とした防災イベントが行われました。地震や津波に対する県の防災に関する講演、福祉施設で用いる防災システムの紹介、そして「目で聴くテレビ」の専用受信機を使用した災害時を想定した情報保障訓練(テレビニュースのリアルタイム手話、字幕放送の実験放送)が行われました。情報を自力で入手出来る環境をつくるこれらの取り組みは非常に重要なものであり、放送局や福祉関係者などの関心も高く、100名近くの参加がありました。福祉施設と行政、放送局が連携したこのような取り組みが各地で行われるようになってほしいと感じました。

がんばろう! つばさネットワーク 3月23日(土) 高校生交流で被災地の元気に貢献する! 親善野球試合



東日本大震災で被害の大きかったエリアにある宮城県の登米高校・気仙沼高校の生徒を招待し、茨木市内の高校生と野球の親善試合および2泊3日の地域住民宅へのホームステイなど交流を深める活動が行われました。これまで継続して実施されており、昨年の大阪北部地震の際は、両校よりいち早く救援物資が届くなど、相互支援という形に結びついていると思いました。初日には、春日丘高校で歓迎セレブションが行われ、「私たちは忘れていない」との地域の思いが伝えられました。地元住民の協力を得ながら、イベントを継続していることが、復興支援に確実に繋がっていると実感しました。

2019年度AED訓練器等助成事業 の助成先が決定しました

2015年度より、公募によるAED訓練器等助成事業を実施し、救命処置の普及活動に取り組む団体を応援しています。2019年度助成では、以下のとおり11団体に提供しました。

団体名 [11団体] (50音順)	
117KOBЕ ぼうさいマスター育成会議 (神戸市)	学校法人田島学園 近畿社会福祉専門学校 (大阪市)
特定非営利活動法人おうみ救命プロジェクト (守山市)	日本ペイント・オートモーティブコーティングス株式会社 (枚方市)
救急・災害医療&防災教育研究会 (大阪市)	日本防災士会大阪府支部堺ブロック (堺市)
有限会社志縁塾大阪支部 (大阪市)	特定非営利活動法人ニューいぶき FAST いぶき (神戸市)
Japan Water Active Life-Saving Team (伊丹市)	南金田地区防災対策委員会 (吹田市)
須磨救急ボランティア (明石市)	

訓練器の提供を受けて ~助成先団体からコメントをいただきました~



特定非営利活動法人 おうみ救命プロジェクト

特定非営利活動法人おうみ救命プロジェクトは医療従事者からなる心肺蘇生普及団体で、滋賀県内の学校を主な対象として活動を行っています。児童・生徒から教職員、保護者まで幅広く受講していただいています。助成いただいたAED訓練器等を用いることで、リアリティのある講習ができるだけでなく、心肺蘇生の質を評価した効果的な講習ができるかと期待しています。引き続き活発な心肺蘇生普及活動を行ってまいります。



学校法人田島学園 近畿社会福祉専門学校

本校は2年制の介護福祉士養成課程の学校です。現在の日本は高齢者も急増している中、利用者の命や生活を守る仕事をするために、日々学生は専門性を高めています。本校の学生だけではなく、地域の方や施設現場で働いている介護職の方まで幅広い方を対象として、「人の『いのち』の大切さや勇気をもつ」をモットーに、今回提供していただいた訓練器をツールとして、緊急時でも落ち着いて対応できるように救命講習を行ってまいります。



南金田地区防災対策委員会

吹田市で活動している「南金田地区防災対策委員会」です。昨年の大阪北部地震で、被害に遭われた家屋があり、住民がおられる中で痛感したのが「『助かるいのち』をひとりでも多く助ける。」という想いです。前回の申請は不採択でしたが、組織を見直し単自治会ではなく周辺自治会と「協力・連携」し、新たに地区防災委員会を組織し、活動してきました。助成いただいた器具を有効活用し頑張ります。

AED訓練器等助成事業 助成期間終了団体

2016年度から活動されてきた以下の7団体は2019年3月末で3年間の助成対象期間を終了されました。3年間積極的に取り組んでいただき、ありがとうございました。

団体名 [7団体] (50音順)	
大阪市立墨江丘中学校 (大阪市)	西宮市甲子園二・三番町自治会防犯・防災部 西宮応急手当グループ (西宮市)
北区救急ボランティア (神戸市)	社会福祉法人 白寿会 (大阪市)
けやき台自治会 (三田市)	学校法人 森ノ宮医療学園 森ノ宮医療学園専門学校 (大阪市)
神戸常盤大学 (神戸市)	

AED訓練器等助成活動紹介

2019年1月から3月にかけて、各地で開催された救命処置の普及啓発活動の講習会を訪問しました。各地で取り組む、助成先団体の活動の様態をご紹介します。



1月12日(土) 認定NPO法人 子どものみらい尼崎

2歳未満の1人目の子どもを育児している方を対象に「乳幼児救命講座」が開催されました。乳幼児に多い誤嚥・誤飲時の対処方や胸骨圧迫・AEDの使い方について映像資料を用いて説明が行われ、その後、AED訓練器等を使用した実技講習が行われました。訓練人形1体につき1名の講師がつき、質問にも丁寧に答える様子が印象に残りました。定員以上の応募があり、託児スペースを設けるなど、受講者に安心して参加していただけるように工夫されていました。



1月19日(土) けやき台自治会

「自分たちの街を自分たちで守ること」をモットーに、地元企業の従業員に対しても救急救命の講習会を開催する大変活力のある団体です。今回は、地域住民を対象とした講習会が開催され、映像資料を使用した説明や、AED訓練器等を使用した実技が行われました。地域のAED設置場所の紹介や、2018年12月に開催された「三田国際マスターズマラソン」において、実際に心臓マッサージとAEDを使用して救命に成功した事例紹介も行われ、参加者の身近な内容を交えた大変有意義な講習会でした。



1月22日(火) 社会福祉法人 月の輪学院

介護施設で働く職員を対象に講習会が開催されました。最初に、消防が作成した救命講習用資料を用いての説明が行われ、その後、AED訓練器等を使用した実技の講習が行われました。受講者である施設の職員は、万一の緊急事態に備え、それぞれが緊張感を持って参加しており、質問も多く大変活発な講習会でした。指導員の解説はきめ細かく、参加者からの質問にも一つひとつしっかりと説明されていました。



2月7日(木) 大阪府立交野高等学校

交野高等学校1年生の保健体育の授業において、AED訓練器等を使用した講習会が開催されました。初めに保健体育担当の先生により救命処置に関する説明が行われ、その後、グループに分かれ心肺蘇生法とAED実技講習が実施されました。受講者数が多数であるため、当財団が提供した器材の他にも多くの器材を準備し、しっかりと実技を行えるようにしていました。同校では心肺蘇生法や応急手当に関して、授業等で教えることが定着しており、生徒の習得レベルは非常に高いと感じました。

2018年度 第8回いのちのセミナー

今年度の「いのちのセミナー～ひとのいのち 私のいのち を考える～」は、全8回の開催がすべて終了いたしました。その第8回を3月17日(日)に松下IMPホールにて開催しました。その講演内容の一部をお届けします。



第8回いのちのセミナー

幸せさがして

～あなたらしい「いのち」を考える～

講師：浜村 淳氏

パーソナリティ 映画評論家

テレビ・ラジオ番組出演といのち

私は毎朝の生放送「ありがとう浜村淳です」でしゃべり続けてこの4月で45年目に入ります。ひとえに皆様方のご支援のおかげと感謝しております。テレビでは、健康を考える「健康手帳」という番組を23年間続けてきました。その中で、「いのち」のありがたさ、「いのち」の様々な問題への多くの知識を得ました。

例えば、日本人の寿命に関し屈指の長寿国であることはご承知のとおりですが、男女の寿命差の理由は医者にもよくわかりません。ただ、ご夫婦がいて、奥様に先立たれたご主人はその後の平均寿命は5年。逆にご主人に先立たれた奥様は、なんとそれから15年も生きられるそうです。そして記憶が怪しくなると真っ先に消えていくのはご主人の名前と顔だそうです。ですから、ご主人、是非、日頃から威張らないで奥様を大切にしてください。

歯科医から聞いた話ですが、歯が一本もなかった70歳を過ぎた男性に、健康と歯はつながっているからと、総入れ歯を勧めたところ、途端に若返り、若い女性と交際するまでに元気になったということです。人の「いのち」は本当にいろいろなところで繋がっているということを感じました。

避けては通れない認知症の問題

「いのち」に関わることとして、お年を召した方に大きく関わる問題に、「認知症との付き合い方」があります。医学的な原因はさておき、いわゆるボケない人はどういうタイプかと言うと、

よくしゃべる人、よく笑う人、よく歌を歌う人だそうで、反対に周りの人とも付き合いもしない、しゃべりもしない人は認知症になりやすいといわれています。ですから、明るく、楽しく、陽気に暮らすことが大事だと医者もよくおっしゃっています。

また、認知症予防には、出かける際に忘れてはいけないものの頭文字を並べた「はとがまめくってパ」等、言葉あそびのような頭の体操も心掛けていただきたいと思います。

周囲の接し方としては挨拶。これが大事なのです。「おじいさん、元気になっているか」「おばあちゃん、腰痛いところないか」という声、これが一番嬉しい。それで心が明るくなるのです。お年寄りを大事にする国は栄えるとも昔からいわれています。

長く幸せに生きるために

とある方のお見舞いに行ったとき、病院の待合の壁に「ボケたらいかん長生きしなはれ」という歌の歌詞が貼ってありました。

年をとると、若い人がやっていることが黙って見てられないのです。「あかん、あかん、わしら若いころは…」と。そんな口出しはせず黙って見て下さい。また、お年寄りが憎まれ口や愚痴をいうのはやめなさい。そして人のことを褒めてあげなさい。そして、「ここはどうするのですか」と聞かれたら初めて教えてあげなさい。それまで知らんぷりでいなさいと。こんなことが一番の歌詞に書いてあります。

日本の家は昔は多世代同居しているところが多かったと思いますが、いずれ世話になる身なのだから、(若い人に)勝ったらあかん負けなさいと。一歩下がって譲るのが円満に行くコツだと。こんなことが書いてあるのが二番の歌詞です。

六番まであって長いので省略しますが、これとある芸能人の方も気に入って、作曲家のところへ頼みこみ曲までつけてしまいました。かつては販売もされておりました。確かに、長く幸せに生きるために必要なことが書いてあるなあと思えます。

映画で描かれた認知症と
幸せに生きるための接し方

今までに認知症を扱った映画は随分たくさんあります。認知症を防ぐためにはひとりで引きこもらず、周りに親しみ、楽しむことが大切だということや、認知症の人は遠い昔のことは良く覚えていたこと等、それらを映画からも窺い知ることが出来ます。

「老人認知症の世界」という映画がありました。決して暗く沈んだ映画ではなく、笑いがいっぱいな映画です。ある75歳の認知症の女性が登場します。自分の名前も、冒頭でも言いましたが、亡くなったご主人の名前も覚えていないが、小さい頃にやった百人一首は全札覚えています。

2月15日(金) 垂水マミーズ

「NPO法人ひと・コネクト兵庫」の託児所スタッフを対象とした講習会が開催されました。受講者は前日までに神戸市が運営しているWEB講習を受講することが必須であり、全員受講証明書を持参しての参加でした。受講者全員が託児所スタッフであったため、異常時の連絡体制(親への連絡の取り方やスタッフの連携など)や、一次救命処置の重要性、ならびに乳児に対する誤嚥・誤飲に関して詳しく説明が行われていました。

質問内容は多岐にわたっていましたが、経験豊富な指導者が一つひとつ丁寧に答え、大変有意義な講習会でした。



2月17日(日) 中仁野自治会自主防災会

中仁野自治会自主防災会のメンバーや家族の方を対象に、消防OBと応急手当普及員の資格を持つ指導員による講習会が開催されました。経験豊富な指導員から具体的な事例を交えながら分かりやすい説明が行われました。

また、過去に付近を流れる市川沿岸で水害が発生したこともあり、冒頭にNHKの防災情報の見方の説明があり、河川の水位の情報やハザードマップの見方など増水時の適切な対応の周知が図られました。参加された方からは、「思った以上に行動するのは難しいと感じた。このように実際に体験出来る訓練は重要だ」との声があったのが印象的でした。



2月22日(金) 大阪J

高槻市立芝谷中学校2年生の生徒を対象とした講習会が開催されました。学校側も大変熱心な様子であり、授業時間を使つての講習会となりました。指導員は大阪Jに所属している高槻市北消防署の職員などが行い、一次救命処置の重要性(救命の連鎖)や、グループに分かれて胸骨圧迫の仕方ならびにAEDの使用方について講習が行われました。

ほとんどの生徒が一次救命処置の講習会を初めて受講していたこともあり、指導員の説明に熱心に耳を傾け、また質問も多く大変活発な講習会でした。



3月4日(月) 医療法人浩治会 介護老人保健施設 大今里ケアホーム

大今里ケアホームの職員を対象とした講習会が開催されました。初めに、指導者である看護師2名から救命処置の必要性に関して配布資料を用いながら説明が行われ、その後、受講者一人ひとりがじっくり時間をかけて訓練人形とAED訓練器を用いて実技を行いました。万一の緊急事態に備え、納得いくまで何度も訓練人形やAED訓練器を使用して実技を行うなど、大変熱心に取り組んでいました。

また、指導者が看護師ということもあり、実体験に基づいた救命処置の経験談を伝えるなど、受講者にとって大変効果的な講習会でした。



3月20日(水) けあらん

神戸ランナーズステーションの会員の方を対象とした講習会が開催されました。初めに、救命処置の必要性に関する説明を行い、その後、訓練人形とAED訓練器を使用して実技が行われました。マラソンに携わる方が多く参加しており、実際に昨年度のマラソン大会中に心筋梗塞で倒れた方を救命処置した際の体験談を話すなど、受講者全員の理解度が深まるカリキュラムで実施されました。

万一の緊急事態に備え、受講者は納得するまで繰り返し実技を行うなど、大変有意義な講習会でした。



ました。そう言われたらその行動・判断を否定することはできません。「あなたが逃げない気持ちも分かる。でも、そんな死に方をしたら東京に住む息子さんが一生悔やむのではないか。」と、私は息子さんの尺度で話をしました。その時、そのお年寄りにはハッとした顔で、「そうやな、死んでまで息子にそんな思いをさせちゃいかんもんな。やっぱり逃げるわ。」と言ったのです。母親は子どものことを思ったり、父親は家のことを思ったり、人は人とのつながりの中で大事な人のことを思い、人として逃げられないという側面があります。それをどう克服していくべきか、地域のみんで逃げるにはどうしたらいいかということを考える必要があります。「逃げない」という思いがなぜ出てくるのか、それを読み解いた上で解を見つけていくという、納得のコミュニケーションがいかに重要かということを強く感じています。

釜石のこと

東日本大震災のとき、釜石の子供たちは一生懸命逃げてくださいました。何よりも地域のお年寄りたちが、「自分たちが助かる助からんじゃない。津波に向き合うということはこういうことだ。」と、子供たち、孫たちに背中を見せるために避難訓練にも積極的に参加する環境だったからこそ、そういう子供たちが育まれたのだと思います。一人ひとりが自分の「いのち」に責任をもって、(母が子を)迎えないいなくてもあの子はきっと逃げていると、信頼で結び合ったときに、母と子の「いのち」が守られる。これが「てんでんこ」(※) できるということなのです。人は危うい状況になったときに考えるのは、その人にとって一番大切な人のことです。一人ひとりが出来る限り自分の「いのち」を守るということは、他者の「いのち」を守るということになるのです。防災教育というのは「いのちの教育」なのです。親が子と、祖父母が孫と相互に思い合う中で、一人ひとりが「いのち」を守るということを実効性のある形で考えられるようになるのだと思っています。

※津波が来たら家族のことさえ気にせず「てんでばらばら」に逃げなさいという三陸地方に伝わる言葉

おわりに

今後、自然はますます荒ぶると思います。これまでの対策を積み増やしていくことを考えていく形から、もう少し人間を見ていくこと、社会を見ていくこと、その上で仕組みを考えていくこと、そして私たち自身も自らの「いのち」を何かに委ねようとしている自分の姿と向き合うことをしない限り、さらなる防災や安全は確保できないのではないかと思います。



の犠牲が出てしまいました。ある意味、教訓が災いにつながった一面もあるわけです。

地球温暖化の影響もあり、これからの気象災害を考えるとどんなことが起こるか分かりません。こうしたらいいなんでいえません。そういう状況の中で向き合い方をどうすべきか。

これまでの行政主導のマニュアルによる防災というやり方は、住民から自らがその災害に向き合っているんだという当事者の意識を剥ぎ取っているように思います。

ここに社会の仕組みとして、個人として、何か抜本的に考え直さなければならない問題があるのではないのでしょうか。私は、そのことを考えていくうえで「主体性」という言葉が重要になってくると考えます。

行政主導の防災の転換

防災白書によると、1959年の伊勢湾台風の前年までは毎年1,000人以上、そして伊勢湾台風では5,000人を超える方が亡くなりました。これほどの死者を毎年出すのは先進国の体をなしていないとして、災害対策基本法を作り、行政は住民を守る責務を有するとして、その法の下で行政主導による防災インフラを整備しました。それにより、阪神淡路大震災と東日本大震災を除き、災害による死者は年間100人未満に減らしてきました。そのことはよかったわけですが、それが行政主導だったことで、何から何まで役所頼りみたいな感じになってきたように思います。

私は政府の中央防災会議の委員をしており、災害があるたびに報告書を出すのですが、そこで毎回繰り返される「反省」と「対策の積み増し」に個々の内容は正しいと思いながら、防災の主体は行政で行政が住民に避難をお願いするということに違和感を感じることを再三意見してきました。そして今回もその議論がなされていましたが、最終の報告書には、こう書かれていました。「住民主体の防災対策に転換していく必要がある。」と。行政主体の取り組みの根本的な見直しです。「住民は自らの命は自ら守る意識をもって、自らの判断で避難行動をとり、行政はそれを支援する。」そのように書き込んであったわけです。

みんなで逃げるにはどうしたらいいか

自然にあらがえなかったら逃げるしかないのです。しかし、いきなり5メートル浸水するというハザードマップを見せられても誰だって現実感をもって見られないと思います。目の前に危険が迫ってくるまで、その危険を認めようとはしない「正常化の偏見」もあります。ある意味、それは人間らしいことです。その側面から本当に逃げるにはどうしたらいいかと考えたときに、今の防災行政や専門家の正論だけの論調に違和感を持つわけです。

逃げる際には避難の知識や情報が重要だといわれますが、それがあつたからといって、皆が逃げるわけではありません。決してその方々の防災意識が低いわけでもなく、「違う側面」を考える必要があるのではないかと思います。

過去の水害で逃げなかったお年寄りに「(幸い無事だったが)なぜ逃げなかったのか。」と聞いたところ、「逃げたら助かることはわかるが、亡くなった主人と建てた思い出の家を無くしてまで生きようと思わない。避難所についても人に迷惑をかけてしまうだけ。主人が迎えにきたのだと思ってここにいた。」と答え

日中小鳥が義父の相手をしてくれるので家族は助かります。

そんな義父に徘徊が始まるようになり、ある日、嫁が探し尽くし、もう日が落ち暗くなった頃、木の根の穴の暗がりでは義父を発見します。昔、子どもの頃、暗くて帰れなくなった自分を母親が迎えに来てくれた姿に、いま自分を探しに来た息子の嫁の姿が重なり、思わずしがみついて泣き出してしまいます。遠い昔のことは覚えているのです。それから間もなく、義父は亡くなるのですが、息子の嫁は、残された小鳥を見ていると、つい、義父を思い出し、義父が生前やっていたとおりの小鳥に話しかけてしまうのです。「もしもし…」と。いくら話しかけても何も返答がない小鳥とのやりとりを前に、自分がもっと義父の話を聞き、義父がしてほしいことをもっとやってあげればよかったと悔やむ姿が描かれ、映画は終わります。何かの参考になればと思います。

これから皆さんには、認知症の方に対して、ご飯さえたべさせていたらよいというような態度はとらないで、是非大切にしてください。ご自身の健康にも十分ご注意ください。早期診断、早期発見、早期治療をしていただきたいと思っています。



次に80歳の同じく認知症の女性が登場します。この方も自分の名前も言えませんが、彼女にタオルを畳ませたら、寸分の乱れもなく端と端が重なる見事な畳み方なのです。ですから、彼女にはタオルの畳み方の指導をしてもらっています。

彼女たちは脳の細胞の一部が壊れただけで残りは健全なままに残っているのです。数人が集まっては笑いながら賑やかに暮らします。

その一方で、男性も登場しますが、男性が認知症を患うとダメで、数人いても話もせず、黙ったまま。これではダメだと、病院がこちらでも出来ることを見つけやってもらったら、自分も役立つという意識が芽生え、認知症の進行を止めることができたということです。従って、周りと楽しむことだけでなく、簡単なことは自分でやってもらうことも、周囲の接し方として大切なことのように思います。

「恍惚の人」という映画がありました。年配夫婦がいて、奥様に先立たれたご主人が認知症を患い、それに息子夫婦が苦しみながら向き合う様子が描かれています。

息子が認知症の父親を疎むのに対し、息子の嫁は義父の面倒を診るわけですが、それでも度重なる義父の問題行動に疲れ切ります。あるとき義父が小鳥屋の前で立ち止まって動かなかったことから、嫁は小鳥を買い、家に持ち帰ります。すると義父はその小鳥に「もしもし」「もしもし」と話しかけるんですね。一

2018年度 安全セミナー

2月2日(土)、毎日新聞オーバルホールにて2018年度安全セミナーを開催しました。

昨年は地震や台風、豪雨など、日本全体が大きな災害に見舞われました。近年の激甚化する自然災害に対する不安はますます高まっています。そこで、今回はこの夏以降繰り返し発生した風水害をテーマに、東日本大震災における『釜石の奇跡』を導き出した片田敏孝氏を講師に迎え、自然との向き合い方についてご講演いただきました。その講演内容の一部をお届けします。

荒ぶる自然災害から犠牲者ゼロを目指す

～危機に主体的に備えるために～

講師: 片田 敏孝氏

東京大学大学院情報学環特任教授 群馬大学名誉教授



キーワードは主体性

平成最後の夏、本当に大きな自然災害に見舞われました。7月の豪雨もありましたが、関西でいうならば台風21号。実に25年ぶりの勢力の強さ、風の強さだったといわれています。地球温暖化により水蒸気量が増え、多雨になる。そして一つひとつの台風が大きくなる。これらの災害がどれだけ甚大な事態をもたらすのか、予想も立てられない状況になってきています。

7月の豪雨では、倉敷の真備地区で61人の方が逃げ遅れ等により亡くなるという大変な被害が出ました。この地域では堤防の整備が進む前は5メートルの浸水は頻りにあったのですが、治水が進んでからはそのようなこともなくなりました。50センチほど水に浸かった際に、碑を建て地域に教訓として残したのですが、今回はそれを遥かに超える5メートルの水に浸かり多く

2019年度公募助成イベント情報

2019年度公募助成先団体の活動予定をご紹介します。内容等の詳細は、各団体へ直接お問い合わせください。

連続講座 第1回

[申込要 5/8 (水) 締切、参加費500円]

4回の連続講座の第1回目です。スピリチュアルケア研究の第一人者である聖学院大学大学院教授の窪寺俊之氏を迎え、大切な人を亡くしたグリーフについて、また日常のケアの現場での対応についてお話しいただきます。

日 時: 5月11日(土) 14:00~16:00
場 所: プラウドタワー大津 (JR大津駅徒歩2分)
問合せ: グリーフサポート大津
TEL: 077-521-0356
MAIL: lullotsu55@yahoo.co.jp

心肺蘇生講習会

[申込要、参加費無料]

施設職員と身体障がいをお持ちの方を対象とする心肺蘇生の講習会を実施します。

日 時: 5月16日(木) 13:30~15:30
場 所: 社会福祉法人あいえる協会 ウィル
(大阪市住吉区清水丘2-16-5 南海住ノ江駅 徒歩10分)
問合せ: 特定非営利活動法人 大阪ライフサポート協会
TEL: 06-6370-5883
MAIL: osakalsa@osakalifesupport.jp

2019年度いのちのセミナー ~さまざまな いのちに向き合い いのちを想う~ 開催のお知らせ

2019年度いのちのセミナーは、以下のとおり開催を予定しております。募集は講演毎に行います。募集を行う際には、当財団ホームページや京阪神の駅等でお知らせいたします。ご応募お待ちしております。

(敬称略)

第1回

2019年6月2日(日)

時間: 13:30~15:00
会場: 松下IMPホール

講師:

柳家 花緑

落語家



募集中
(応募締切2019年
5月7日(火))

第2回

2019年8月2日(金)

時間: 18:30~20:00
会場: 毎日新聞オーバルホール

講師:

宮田 修

千葉県熊野神社
宮司
元NHKアナウン
サー



第3回

2019年8月23日(金)

時間: 18:30~20:00
会場: 毎日新聞オーバルホール

講師:

大津 秀一

早期緩和ケア
大津秀一クリ
ニック院長



第4回

2019年9月5日(木)

時間: 18:30~20:00
会場: 毎日新聞オーバルホール

講師:

金菱 清

災害社会学者
東北学院大学
教授



第5回

2019年9月27日(金)

時間: 18:30~20:00
会場: 毎日新聞オーバルホール

講師:

吉田 実盛

兵庫県鶴林寺
塔頭真光院住職
叡山学院教授



第6回

2019年10月17日(木)

時間: 18:30~20:00
会場: 毎日新聞オーバルホール

講師:

入江 杏

世田谷一家殺人
事件被害者遺族
「ミシュカの森」
主宰



第7回

2019年11月8日(金)

時間: 18:30~20:00
会場: 毎日新聞オーバルホール

講師:

沼野 尚美

宝塚市立病院
ケア棟棟チャプ
レンカウンセラー



第8回

2020年3月15日(日)

時間: 13:30~15:00
会場: 松下IMPホール

講師:

米良 美一

カウンターテナー
歌手



アンケート実施中

毎号、皆様からご好評いただいておりますReliefにつきまして、いつもご感想をお聞かせください、ありがとうございます！
今号についてのご意見やご感想もお待ちしております。(https://www.jrw-relief-f.or.jp/enquete/)



編集後記

4月1日で当財団が設立10年を迎えました。これからも安全で安心な社会作りを目指し、「いのち」に向き合う取り組みを一步一步進めてまいります。今後とも、ご支援を賜りますようお願いいたします。(財団職員一同)

広報誌「Relief」2019年4月号(vol.35)

【表紙写真:これまで発行した広報誌「Relief」の表紙を振り返ってみました!】

Relief(リリーフ)には「ほっとする、安堵。安心」といった意味があります。当財団は、「安全で安心できる社会」の実現を目指した事業に取り組んでいます。

編集発行/公益財団法人JR西日本あんしん社会財団
〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号 TEL:06-6375-3202
ホームページ: https://www.jrw-relief-f.or.jp/

Facebook

ホームページ

